

トマス・ハーディ

31 出稼ぎ女の悲しい物語
(182-)

I

ウィニヤード峡谷から ながいながい一日を
ながいながい 一日を
わたしたちは 北に向かって歩きました
これまでもな^{かよ}ども通^こった同じ道
太陽はギラギラと背を焦がし 5
背^{はいのう}囊は肩にめりこんで
掘割り道 田圃^{たんぼ}道 通行税取立道^{ターン・バイク}を通りすぎ
物悲しげなセッジ・ムアを巡ってゆきました

II

まる二十マイルを わたしたちはてくてく歩きました
わたしたちは てくてく歩きました 10
わたしの情夫と からかい屋のジョン
そして リーばあさんとわたし
日が西に傾くころ
険しいポルドンの頂上に登りました
そして 見渡せる景色のなかでもっとも美しい 15
夕日に輝くあの旅籠^{はたご}が見えてきました

III

幾日も 二人は並んでいっしょに歩きました
いつも 並んでいっしょに
グレイトフォレスト 広大なブラックムアを
そして パレット川が流れるほとりを 20
メンディプの尾根では 突風に逆らい
橋のないヨウ川は 手を取りあつて渡り
マーシュウツドの無数の^{ぶよ}蝸にも 仲良く刺されて
わたしと 情夫は

IV

まれな^{まれ}旅籠^{はたご}が 情夫^{かれ}とわたしは好きでした 25
情夫^{かれ}と わたしは
「玉鹿^{キングス・スタッグ}館」 喉^{ウインド・ウィッスル}うるおす水もない山頂の「風笛^{ウインド・ウィッスル}庵」

ヒントック村共有地の「^{ザ・ホース}龍蹄館」
ウィニヤード峡谷のちんまりした^{はたご}旅籠
プレディ丘では名高い「^{ザ・ハット}草廬庵」
そのほか 人目につかずにすわれるような
あちらこちらの路傍の^{タツブ}居酒屋

30

V

その日 とぼとぼ歩きながら ああ 死ぬほど退屈な
死ぬほど退屈な 一日でした
わたしは ^{かれ}情夫を気紛れにからかいました
退屈しのぎの気紛れに
からかい屋のジョンと並んで歩き
ジョンの手をわたしの腰に巻きつけて
^{かれ}情夫の不機嫌な顔には
目もくれようとしませんでした

35

40

VI

こうしてボルドンの頂上に ようやくわたしたちは
ようやく わたしたちはたどり着きました
そして日が沈むころ その^{はたご}旅籠に入ってゆきました
人ぞ知る「^{マーシャルズ・エルム}鎮守乃楡庵」
メンディップから西の海まで
岩山と草原が眼下に^{ひら}開け
これほどの景勝の地は
この王国にも ^{くに}ふたつとないことでしょう

45

VII

長椅子にみんな並んで
四人みんな並んで 腰かけました
わたしはジョンの隣りにすわって
言い寄られ 口説かれた振りをしました
するとジョンが わたしを膝にのせ
今度は自分が恋の相手だ
だから リーばあさんが
^{かれ}情夫の相手にまわれ と悪たれたのです

50

55

VIII

するとそのとき 今まで聞いたこともない
今まで聞いたこともない ^{こえ}声音がして
愛する^{かれ}情夫が わたしにむかつて
「^{おとこ}奥様 ひと言お尋ねいたします

60

身籠^{みごも}ったその子はどなたの子です
手前が今まで尽くした挙げ句 まさか彼奴^{あやつ}の子供では？」
神かけてジョンの子ではなかったのに ああ
わたしは^{うなず} 頷きました なおも彼をからかって

IX

その瞬間^{とき}彼は起ちあがり そしてナイフで 65
そして ナイフで
からかい屋のジョニーの命を絶ちました
そうです そこで 日暮れどき
傾いた入り日の光が そばの窓から射しこんで
ジョンの血とどんよりした目を 金色^{こんじき}に染めました 70
リーばあさんとわたしが ほとんど
気づく間もない出来事でした

X

旅籠^{はたご}では 悲しい話が
悲しい話が 噂にのぼります
イヴェルチェスター刑務所で 75
わたしの恋人 愛する人がぶらんこ往生した噂
困りに困って馬一頭を盗んだほかは
これまでに 一度の悪事も働いていないのに
(ブルー・ジミーは最後にぶらんこ往生とげるまで
たくさんの馬を盗んでいます) 80

XI

それから先は わたしは独りで渡り歩きました
独りで 独りで
彼の死んだ日 わたしは呻き苦しんで
彼の^う子供を死産みおとしました
刑務所のすぐ近く 一本の木の下で 85
誰ひとり付添うものもなく それというのも
リーばあさんは グラストンですでに亡くなり
わたしは荒野に 独り取り残されてしまったのです

XII

そして夜 ぐったりと横になっていると 90
ぐったりと 横になっていると
木の葉が頬に舞い落ちて
赤い月が低く傾いたころ
わたしが死ぬほど接吻^{くちづけ}したかったあの人の亡霊が

現れ出て 訊^きくのです 「さあ 答えてくれ
あれは俺の子だったのか それともジョンの？
教えてくれ 安らかに眠れるために」

95

XIII

もちろん わたしはそのとき答えました
わたしはそのとき 亡^か霊^れに答えて言いました
ふたりが唇^{くちびる}を合わせ 愛^あを誓^{ちか}ってそれ以来
どんな男^{おとこ}からも 操^{みさお}を守^{まも}ってきた ということ
それを聞いて 亡^か霊^れは微笑^{ほほえ}み 消^きえ去^いりました
風^{かぜ}が立ち 朝^あ日^ひを呼^よび起^おこす時^{とき}刻^{くわ}がきたので
——それも今^{いま}では遠^{とほ}い昔^{むかし} わたしはこうしてただ独^{ひと}り
ウエスタン・ムアをしばしば訪^まれ 彷徨^{さまよ}うのです

100

(山中光義訳)